「外国につながる子ども達とともに」

姫路市立城東小学校
教諭　　西野　明美

１　取組の内容・方法

(1)　はじめに

ベトナム戦争終結後、姫路に難民定住促進センターが開設されたことから、本校やその周辺の学校には、外国につながる子ども、特にベトナム人児童・生徒が多数在籍するようになった。最近では日本生まれの児童が増えたが、外国からの編入も時々ある。ほとんどが日本での定住を希望し、将来の日本を背負う若者となる。この子ども達にどのような力が必要なのか。その力をつけるために、教師は、学校は何をするべきなのか。この命題を追求するために、平成１９年度前任校での日本語指導教室担当となってから現在まで取り組んできたことを紹介する。

(2)　学ぶ力をつける取組

①教科指導型日本語指導の必要性を教員に知らせる

初めて日本語に触れる子どもにとっては、まず、生きていくための日本語（サバイバル言語）や、日常会話のための日本語（生活言語）の習得が必要だ。本校のように多数の外国につながる児童が在籍している学校には、日本語指導として教員が加配され、日本語指導教室が開設される。日本語指導教室では、学習の時間に取り出し指導を行ない、その子の日本語の力に合わせて初期の日本語指導を行なうことで、生活言語の習得向上を目指している。

しかし、生活言語が習得できたから学習についていけるかというと、そうではない。また、日本生まれで会話が流暢であっても、学習についていけなくなる外国人児童も多い。学校では、ともすれば、それは個々の能力の差であると考えられがちだ。実は、児童の能力差によるものというよりは、むしろ、教師が意識して学習中に活用する授業を行なわず、専門的な学習言語の説明不足が原因と考えられる。教師の意識次第で、児童の学習言語の習得が変わってくる。そのことで、児童の学力も変わる。これは、教師の外国人児童への配慮意識の問題だ。まずは、教師の一人一人がそのことを自覚する必要がある。

そこで、外国人児童が在籍する学校の担当者との会議で、「あなたのクラスの子どもは学習言語を理解し、習得できているか？」という内容で、体験や実践を発表したり、教科指導型日本語指導を取り入れた授業を公開したりした。校内でも、教科指導型日本語指導の重要性をことあるごとに話をした。外国人だから理解できなくても仕方がないなどと思ってはいないだろうか。日本語指導の担当者だけが頑張っても、子どもの力は伸びない。学級担任が、専科の教師が、教科指導型日本語指導を行なわなければならないということを伝えてきた。

②教科指導型日本語指導で、授業を組み立てる

教科の学習の中では、その教科特有の日本語が多く使われる。日常会話では使われるこ

とが少ない教科特有の言語（学習言語）を理解しながら、さらに学習内容を理解できるようにすることが求められる。例えば、「はたらく」という言葉を例にとると、日常生活で使われる生活言語では、「仕事をする」という意味でつかわれることが大多数である。しかし、理科の「じしゃくのはたらき」の学習場面では、外国人児童の多くが、「磁石が仕事をするの？」と思っている間に授業が進んでしまう。日常では使われることが少ない、理科の学習の中での「はたらく」の意味を教師が新たな活用として意識して教えなければならない。

このように考えると、毎日の授業の中で意識して教えなければならない「学習言語」はかなりある。単元ごとに、学習内容を理解するために必要な「学習言語」をあらかじめピックアップすることが重要となる。

そこで、大阪教育大学の臼井准教授指導のもと、次のような指導案を作成し、本時に指するべき学習言語を教師が意識できるようにした。

図１　指導案目標設定の一例

5．本時の学習

（1）目　標

算数科：1つの品物が 50 円で買えるか買えないかの判断をもとにして、品物の値段を見積もることができる。

日本語：・「高い」「安い」「買える」「買えない」の意味がわかる。

・「～円より安いから買えます。」「～円より高いから買えません。」を使ってお菓子を買えるか買えないか理由をつけて言うことができる。

（2）展　開

学習活動	支援・指導と評価（◎）	備考
1．買い物場面を設定する。	・興味をもてるように、実物に似せた菓子の模型を使う。	菓子の模型 ワークシート
2．1件目の店で買い物をする ・あめが 48 円です。 ・ガムが 47 円です。	・何が何円か確認する。 ◎関心をもって取り組もうとしている	大きな財布 50円玉1つ 短冊
(1)50円より安いものを1個買う場合 50円より安いから買えます。	・50円でかえますか？かえませんか？ ・50より大きい数→「50円より高い」、50より小さい数→「50円より安い」という言い方を確認する。	やすい たかい

図１は、１年生算数科「かえますか？かえませんか？」の指導案に一部分だ。指導案に書く教科の目標以外に、日本語の目標を記入する。指導案の作成時には、学習内容の理解に必要な言葉は何か、それを本時に何度も用いて習得するにはどのような教師の働きかけが必要かを事前に考える。そのことで、本時の「学習言語」と「学習内容」を同時に習得することができる。実際にこの方法で授業を組み立てると、外国につながる子どもはもちろんのこと、学習についていきにくい日本人の子ども達にとってもわかりやすい内容となった。

（３）自己実現のための取組

①国際交流フェスティバル

日本で学校生活を送り、日本語を話して生活するうちに、親たちが大切にしてきた母国語や母国の文化を忘れ、日本人に同化しようとする傾向がある。また、日本社会の中で不利益を被らないように、名前を日本名に変えてしまう児童もいる。外国人であることを隠すことすらある。どの国の人でも、どの国にいても、自分のアイデンティティ（自分らしさや自己肯定感）をしっかり持ち、自信を持って生きてほしい。そのような願いから、姫路市国際交流フェスティバルに参加している。近隣の小学校には１００人を超えるベトナム人の児童が在籍するため、近隣の３小学校のベトナム人児童の代表が集まり、ベトナムの伝統的な獅子舞（ムーラン）を披露する。ムーランの練習などで顔なじみ

写真１　ムーランの様子

になり仲良くなったり、自分と同じ国にルーツをもつ子どもが他校にもこんなにたくさんいるのかと驚いたりする児童もいる。フェスティバルでは、息を合わせて楽器を鳴らし、舞い、マイクの前で民族名を名乗る。民族名を大切にし、大勢の前で堂々と自国の文化を披露し、アイデンティティを高める大切な機会となっている。

②waiwai 子ども交流会 in 姫路

兵庫県在日外国人教育研究協議会が開催する交流会の一つが、毎年姫路で行われる。事前の打ち合わせでは、外国につながる子ども達だけでなく、日本人の子どもたちにも広く呼び掛けて参加者を募る方法や、子ども達が楽しんで交流できる内容を協議する。ここでも３校合同でムーランの披露をする。また、中国や韓国、ベトナムなどのアジアの国々の遊びや、民族衣装を着る体験、韓国のチャンゴや日本の和太鼓鑑賞・体験など、異文化に触れながら交流を深めることができるような内容となっている。自分の国や、他の国のことを知るよい機会となっていると考える。

③日本語・多言語スピーチコンテスト

３月には、日本語・多言語スピーチコンテストに参加する。小学生から大人まで、年齢は問わない。全員が日本語でスピーチをした後、母国語でスピーチをする。「友だちのこと」「家族のこと」「学校のこと」「進路のこと」「将来の夢」「外国人として日本で生きてきて思うこと」など、スピーチの内容は様々だ。

日本生まれの児童・生徒にとっては、母国語であっても普段読み書きしない母国の言語でのスピーチは簡単ではなく、戸惑いはある。また、子どもは日本語で話すことが増え、親子の母語でのコミュニケーションがとれなくなってしまうケースも珍しくはない。思春期になり、保護者に進路などの詳しい話ができなくなる問題も深刻だ。そのような児童の多くは、学校で多文化共生サポーターの先生に、作文を母国語に翻訳して書いてもらったり、読む指導をしてもらったりして練習する。同様に、家でも保護者から母国語の読み方を教えてもらって練習することができれば、親とのコミュニケーションアップによい機会にもなっていく。

滞日期間の浅い児童・生徒にとってのスピーチコンテストは、逆に、日本語でのスピーチは難しいが、母語ではすらすらと話すことができ、自信を持って自己表現する機会となっている。

コンテストでの審査結果はどうであれ、みんなの前で自分の思いを語ることに意義があり、今の自分を見つめるよい機会となる。また、頑張っている先輩達や、友だちの姿を見せ、自分も頑張ろうという思いを持たせることも大きな目的だ。

この他、他の団体と連携し、外国につながる児童たちの未来を拓く支援を他校の教師たちとともに行っている。

「けん玉大会」「ＢＢＱ大会」「ウォークラリー」など、国籍を問わず、参加した友だちと仲良くなり、友情を深める体験や、「雪遊び」など、母国では体験できなかった遊びの体験、キッザニア甲子園での仕事体験など、学校独自ではできないことをたくさん体験させることができるようになった。これらの体験活動は、これから進む道を考え、友だちとと

もに進んでいくための素地をつくる機会となっている。

２　取組の成果

私達教師が外国につながる子ども達につけるべき力は、自分で未来を切り拓いていけるだけの学力と、ともに歩んでいくよき仲間をつくる力、そして、自分に自信を持って生きていくためのアイデンティティを確立する力だと考えている。もちろん日本人の子ども達に対しても同じことが言えるが、外国につながる子ども達は、日本人の子ども達の何倍も苦労することが多いのが現実である。

そのようなことを考え続けてきたこの１１年間の毎日の取組は少しずつではあるが、その「少しずつ」が積み重なってきていると実感している。

学校では、国籍に関わらず、児童たちが仲良く遊び、学ぶ姿が見られる。日本語指導教室での取り出し授業で力を伸ばし、学力が上がってきている児童もいる。学習に対して意欲をもって取り組める外国人児童も増えてきた。校内の教職員は、外国につながる子どもにわかりやすい授業を心がけ、日々の授業を行おうとしている。そして、それは、日本人児童の学習にとってもよい成果を上げていると言える。

学校外では、他の学校や団体とつながり、学校だけでは実現できないような様々な体験を児童ができる機会をたくさん得ることができた。

３　課題及び今後の取組の方向

外国人児童の進路は、依然として厳しい。保護者の経済状態によっては、高校や大学への進学をあきらめなければならないこともある。保護者への情報が十分でないために、よりよい進路選択ができないこともある。また、公立高校の外国人枠はまだほんの少ししかなく、日本語が十分でない子どもにとっては、厳しい倍率だ。滞日年数の制限もある。

私達は、小学校の教師であっても小学校でのことだけを考えず、もっと先の、高校や大学への進学に向けて取り組まなければならない。

また、小学生の時から、未来の夢を膨らませられない現実の中で苦しんでいる児童もいる。外国人が集住している学校でない学校に通う場合は、日本語指導の支援を継続して受けられないこともある。

一人でも多くの外国につながる子ども達が、未来を切り拓く力をつけ、日本の未来を背負うたくましい若者に成長できるよう、今後も日々の「少しずつ」を積み重ねたいと思う。

また、他の学校や各種団体との連携はもちろん、子ども達が育つ地域の人々とつながり、日本人の子ども達とともに外国につながる子ども達も一緒に幸せに育っていける関係づくりを目指していきたい。